

第1作 2007— 2008	光 ～人間はこんなにももろく こんなにも強い～ 「かあさん、ここに、ここにあった。」 起きてみる 夜明けだ！	1922年3月3日京都の岡崎公会堂に全国から約3,000人の人々が集い「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と高らかに人間の尊厳と平等をうたい上げた水平社宣言が朗読される全国水平社創立大会までの物語。 人権劇団「光座」の原点ともいえる渾身の第1作目。
第2作 2009— 2010	夕やけがうつくしい ～届いたらいいな～	明治時代の後期に、高知県に生まれた1人の女性に焦点をあてた物語。貧しさにより文字を奪われた彼女が1970年代になって開設された識字学級に通い文字を取り戻していくことで見えていた世界が変わっていく…。 「識字」を通して人間の尊さが表現された作品。
第3作 2011— 2012	経験の唄 「父ちゃん 朝日がのぼってきよりたい」 部落の夜明けばい！	お母さんと離ればなれで暮らし家庭を支えるために必死に働く龍一、ところがある日ひとりの教師に出会い、日本国憲法を知り学習をはじめ大きな夢をもつ。 想いは町長に伝わり町民1,300名の署名を集め国を動かし待望の「小国町隣保館」が建設されるまでの物語。 「光座」が我町の真実にスポットをあてた「人権の故郷づくりの基礎」となる作品。
第4作 2013— 2014	ひゃくまんつぶの涙 ～動物の命を肉にする仕事は 私たちに動物の命をつなぐ仕事です ～	食肉センターの閉鎖に伴い熟練された技術によって受け継がれてきた命をつなげる仕事は時の流れの中で分業・機械化される時代を迎えています。食肉センターを退職され動物たちの命を私たちに伝える仕事を語り継いでいくことを選んだ1人の男性に焦点をあてた物語。 「命の尊さを魂で届ける」作品。
第5作 2015— 2016	右手 世の中のすべてのことは 一人ひとりの一歩から始まる 決して忘れてはいけない 「人間の教訓」	1945年5月、日本軍の攻撃でB29爆撃機から落下傘で降下した11人の米兵が、村人たちに殺害暴行された事件を目撃した人たちや語り継ぐ人たちから証言を聞き取りながら創りあげていきました。 「同じ人間を暴行する手、その暴行から人間を守ろうとする手…。自分の手を何のために使っていくべきなのか」「戦争は決してしてはいけないことを語りつぐ」作品。
第6作 2017—	焰 昨日の自分だけは 今日の自分を信じてくれていた。	人間らしく生きていきたい。そのために世の中の仕組みをわかりたい。 憲法の理想を生活の中に実現するために高知県長浜で起こった教科書を無償にする運動は全国各地に飛び火しました。無視できなくなった政府はついに、義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律を国会で可決するのです。 昨日の自分より、今日の自分。一步一步、理想に向かって歩み続けることの尊さを伝える作品。

人権劇団「光座」の歩み

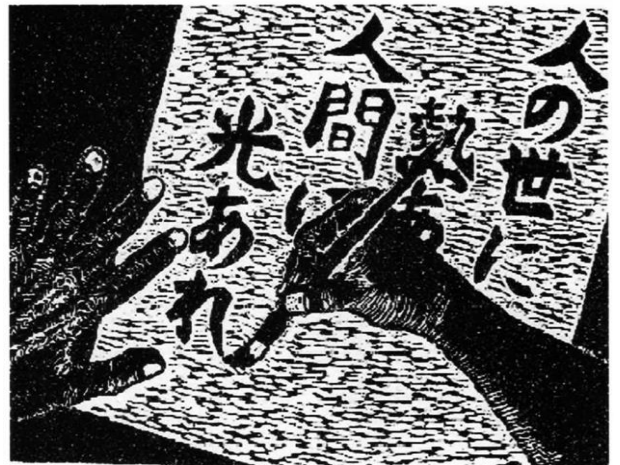
小国の解放運動が始まっておよそ 70 年、その長い間の取り組みの中で、部落解放同盟小国支部は「日本国憲法を暮らしの中に活かす」、部落差別の解消は環境を良くすることも大切なことですが、一人ひとりの心が変わることがもっと大切だということに気付き、「教育に始まり教育に終わる」、人権教育は「自分が変わる教育」を柱に、町民の啓発は町職員が、学校での教育には教職員がきちんと差別について学習できるように、職員学習会、教職員学習会へと結びついて行きました。

およそ 30 年の間その学習会は続けられました。最初は、支部・推進教員と行政職員・教育行政との間にあった溝も、粘り強く取り組む中で少しずつわかりあうようになりました。その中で、「学習を積み重ねる」ということが、私たち一人ひとりの人間としての年輪を重ねることになり、お互いの本音を出し合い、そのことを学習教材とすることで、社会にある差別意識と対応できる一人の人間になろう。という人たちが増えてきたのです。その取り組みはやがて、役場職員による「人権を考える地区懇談会」が始められるまでになり、回を重ねる中で、教職員も協力して一緒に行われるようになりました。

役場職員・教職員・町民が人権課題をととして会話の交流をすることは、人権啓発という役割を果たすばかりでなく、一人ひとりの学びの場となり、そこで深められたことが学校の子どもたちや地域の方々に再び返されていくという好循環をもたらしました。

また、そうした積み重ねは、町と部落解放同盟小国支部との信頼関係を深め、隣保館建設の署名運動に結びつきました。国は建設を認めようとしませんでした。1,300 名の町民の署名が国を動かし、念願の人権同和教育啓発の拠点となる小国町隣保館「パラソルセンター」が建てられたのです。隣保館には、たくさんの子どもたちが集まってきます。建設から昨年で 20 年を超えましたが、年間約 17,000 人もの町民が利用します。対話と交流を通して、部落差別をはじめあらゆる差別を無くすように、人権の町づくりの拠点とされています。

隣保館の建設と同時に、実行委員会組織による全町あげでの『人権・同和教育啓発フェスティバル』が開催されるようになります。そのフェスティバルの中で、とりわけ注目されるのが小学生を中心とした人権劇。「同和」教育に学び続けた教職員と子どもたちが一緒になって、さまざまな人権問題を取り扱った劇が創りあげられ、フェスティバルの中で公演されていきます。それを観て心を動かされた保護者や町職員・教職員の中に、「自分たちにもできることを」という想いが芽生えていきます。その思いはやがて、人権劇団「光座」結成の種につながっていったのです。それは、これまでの小国の解放運動によって導かれ結ばれた、必然のストーリーでした。素人ばかりのアマチュア劇団ですが、劇団員の一人ひとりそれぞれが色んな想いを抱いて、伝えたい、届けたい人の顔を思い浮かべながら、忙しい時間をぬうようにして集います。



台本を見ながら「あーでもない。こうでもない」対話をかわしながら、この版画が創りあげられるのと同じように心をこめて丁寧に幕が仕上げられていくのです。

人権劇団「光座」の名前は、日本で最初の人権宣言「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と高らかに人間の尊厳と平等をうたいあげた「水平社宣言」から名づけられました。現在、劇団員数は延べ 100 名をこえ、2007 年の初公演以来、昨年 16 回目の公演を終え、来場者数も延べ 10,000 人を超えました。

舞台上に立つ役者に光をあてる人たち、音を立てないようにそっと道具を運ぶ人たち、スクリーンに映像を映し出す人たち、音響で役者の背中を押してくれる人たち、裏で託児を担当する人たち、劇に潤いを与えるナレーションの人たち、そして役を引き受ける人たち。みんなの力が結集されます。練習や公演を重ねる中で、「学ぶことによってつながる」・「つながることによってさらに学ぶ」そんないい循環の中で信頼関係が深められます。それは、誰もが困らず、互いに支え合い、一人ひとりが大切にされ安心して生活することができる人権のふるさとづくりにつながると感じています。

最後に、現在小国町では、就学前・小中学校・そして高校と一貫した人権教育を受けた子どもたち、小国町人権啓発フェスティバルで劇を演じた子どもたちが帰郷し仕事をしながら人権劇団「光座」の劇団員として活躍しています。